

『救いと滅び』 ヨハネの福音書 3章 16~21節

1. 神の愛

3章は、冒頭からニコデモという人がイエス様のもとに訪ねて来たことを語っています。そのニコデモに対するイエス様の言葉として本日の16節も「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」と語られています。16節は、聖書の中でも特に有名な箇所です。なぜこの言葉が有名なのかというと、聖書には多くのことが書かれてありますが、その最も大切なことがここにあるからです。それゆえに、この箇所は「聖書の中の聖書」、「聖書の中の小聖書」と言われているほどです。

今日、至る所で愛という言葉がささやかれていますが、その愛は、愛の形をしてはいても、実際には、そうではありません。むしろ愛とは正反対である場合がほとんどです。というのは、愛は自己犠牲が伴うものだからです。しかし、大抵の場合は、ほかの人に与えるものではなく、自分のためにすべてを奪うものになっています。

しかし、ここに本当の愛があります。それは、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」ことの中に現されました。この愛に最も近いものに母親の愛があるでしょう。母親にとってわが子は特別の存在で、まさに目の中に入れても痛くない存在です。母親であればわが子のために自分を犠牲にすることもいとわないでしょう。しかし、そのような愛でさえ「わが子」に限定されたもので、それを超えて愛するということはほとんどありません。

しかし、神の愛はそうではありません。神の愛は、全く愛される価値のない者でさえも愛する愛です。人間は神によって造られたにもかかわらずその神を愛することはおろか、神に背を向け、罪の奴隸となっていました。聖書では、これを罪と言っていますが、この罪深い人間のために、神はそのひとり子を遣わし、十字架で死んでくださったのです。

旧約聖書のホセア書に出てくる物語は、この神の愛がどのようなものかをよく表しています。ホセアは、アモスについて北イスラエルに現れた預言者です（約10年後）。「神は救い給う」という意味の名前で、「ヨシア」や「イエス」と同義です。ホセアの活動時期はBC750~722年頃とされます。ヤロブアム治世の末期から北王国滅亡（BC722年）の直前、あるいは滅亡の目撃者とも推測されます。北王国はヤロブアム2世の繁栄時代を頂点として、以後息子ザカリヤの暗殺、革命政権の乱立等、衰退と混乱の時代に入っていきます。信仰的な状況は、アモスの時代と共通します。すなわち、バアル信仰が日常生活の中に混じり込み、結果として信仰の世俗化、道徳の退廃、虚偽の礼拝等におちいってしまいます。このうちの最悪の面である性的乱れを、ホセアは自身の結婚を通して、痛切に体験します。

ホセアという預言者は、神の愛を証しするために、彼自身得意な生活を余儀なくされました。ホセアは、ディブライムの娘ゴメルと結婚し、三人の子どもが生まれました。しかし、妻のゴメルはホセアと結婚しながらも不貞を続け、彼よりも別の男性を求めたのです。夫のホセアは彼女を愛するあまり、その心は引き裂かれるばかりに痛み、苦します。けれども、ゴメルは夫から離れ、愛人たちのところに身を潜め、売春までするようになります。そのことを知ったホセアは恥を忍んでその場に出向き、お金を払って彼女を連れ戻します。ホセアは彼女が悔い改めることを願い、彼女のすべての罪を赦そうとするのです。

このたぐいまれな経験は、神が神の民イスラエルに対して抱いていた思いを表していました。背かれる者の苦しみと、その背く者への愛の深さを、彼は自分の経験を通して知り、神に反逆しているイスラエルの民を神がどんなに深く愛しておられるのかを語ったのです。いったいどこに夫を捨てて別の男に身も心も寄せた女を愛する人がいるでしょうか。しかし、ホセアは神の命令に従い、別の男に身を売っている妻を愛し、彼女を多くの代価を払って買い戻したのです。これが神の愛です。

いったい神はどのように愛してくださったのでしょうか。ここには、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」とあります。この16節から21節までのところには、「ひとり子」とか「御子」という言葉が

繰り返し出て来ます。その「ひとり子」とは、イエス・キリストのことです。神ご自身が犠牲となってこの世に来られ、十字架にかかる死なれるほどに、愛してくださいました。その愛の広さはいかばかりかというと、「世を」という言葉の中に表されています。神の愛はその選ばれた民イスラエル人だけでなく、この世を愛されました。神の愛は、全世界のあらゆる民族に及ぶのです。しかも、その愛の大きさは、「ひとり子」をお与えになったほどでした。これは十字架での犠牲を指しています。イエス様の死こそ、神が私たちを買い戻すために支払われた代価だったのです。

ローマ書5章7節～8節には、「正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」とあります。神は、私たちがまだ罪人であったときに、キリストが私たちのために死んでくださったことによって、ご自身の愛を明らかにしてくださいました。罪人である私たちのためにいのちを捨ててくださる方がおられる。これが神の愛です。これが聖書の中心です。このような愛は私たち人間の中にはありません。神はこの愛を、「ひとり子」であるイエス・キリストをこの「世」に与えることによって表してくださったのです。

2. 世を愛された

ローマ書9章25～26節に「それは、ホセアの書でも言っておられるとおりです。「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかつた者を愛する者と呼ぶ。『あなたがたは、わたしの民ではない。』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。」とあります。パウロはこの箇所でホセア書2章のイスラエルの民がその罪のために、もはや神の民ではない、と捨てられてしまう、その滅びから回復されて「わが民」「愛する者」「生ける神の子ども」と呼ばれる、怒りの器となってしまっているイスラエルを神が憐れみの器へと変えて下さる恵みが語られている、という預言を引用して「愛さなかつた者を愛する者と呼ぶ。」これは、神から愛されなかつた異邦人である私たちが、愛されるようになったのだと言うこと説明しているのです。ホセアは単にイスラエルの救いを預言しただけではなく、パウロの引用によると来るべき異邦人の救いも預言したことになるのです。

教会が宣べ伝えている福音、つまり良い知らせ、救いの知らせの根本とは、神が「世を愛された」ということです。「世」という言葉は、この世界とそこに生きている私たち人間全体を意味しています。その「世」という言葉が最初に語られたのは、1章9、10節です。「すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかつた。」とあります。1章1～5節に「初めにことばがあつた。ことばは神とともにあつた。ことばは神であつた。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかつた。この方にはいのちがあつた。このいのちは人の光であつた。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかつた。」とあります。その「ことば」が、「まことの光」として世に来られました。それが主イエス・キリストです。イエス様は、「すべての人を照らすそのまことの光が、世に来られた」のです。しかし「世」は、「ことば」、「まことの光」であるイエス様を認めなかつた。「ことば」によって成つたのに、造り主である「ことば」を認めようとしない、受け入れようとしない、それがヨハネの福音書における「世」です。つまり「世」は、神よつて造られたのに、神を認めず、信じようとせず、従おうとしない、神に背き逆らっている「世」なのです。罪によって「闇」となつてしまつて「世」に、「まことの光」であるイエス様が来て下さつたのです。しかし「世」はその光を光として認めようとしないのです。このようにヨハネの福音書は、「世」が、つまりこの世界と全ての人間が、神に逆らう罪の中にあり、「闇」に覆われてしまつてゐることを見つめているのです。

その「世」を神が愛して下さつた、それがここに語られている福音のメッセージの中心です。私たち人間は、造り主である神を神として受け入れ、信じ、従うことをしていない罪人なのです。その私たちが築いているこの世は、罪の「闇」に覆われてゐるのです。その罪人である私たちを、「闇」に閉ざされてしまつてこの「世」を、神はそれにもかかわらず愛して下さいました。愛される資格などない私たちを愛して下さつたのです。

3. ひとり子をお与えになったほどに

しかもその愛は通り一遍のものではありませんでした。「**そのひとり子をお与えになったほどに**」神は「**世**」を愛して下さったのです。初めからあり、ご自身が**神**であり、万物はこの「**ことば**」によって成った方、1章18節に「**父のふところにおられるひとり子の神**」とありますが、その方を、神は「**世**」に与えて下さったのです。与えて下さったというのは、「**ひとり子**」なるイエス様がこの世に人間となって生まれ、生きて下さったということだけではありません。イエス様が、私たちの罪を全て背負って十字架にかかるて死んで下さったということです。神の「**ひとり子**」が罪人である私たちの身代わりとなって死刑になって下さったのです。そのことによって、父である神は私たちの罪を赦して下さり、私たちをもう一度**神**の下で生きる者として下さり、失われた祝福を回復して下さったのです。神はそのように私たちを愛して下さったのです。

それだけではありません。私たちの罪を背負って十字架にかかるて死んで下さったイエス様を、神が復活させ、「**永遠のいのち**」を生きる者として下さったことも含まれています。そのことによって神は、肉体の死を乗り超えて復活と「**永遠のいのち**」を与えるという救いを実現して下さったのです。復活したイエス様は、私たちの復活と「**永遠のいのち**」の先駆け、私たちにもその救いが与えられることの保証となって下さったのです。私たちを支配している死の力に勝利して、復活と「**永遠のいのち**」の約束をも与えて下さったのです。神はそれほどまでに私たちを愛して下さっている、愛されるに値しない罪人であるこの私に、このようなとてつもない愛を注いで下さっている、それがイエス様による救いの福音の根本なのです。

4. 救いと滅び

16節後半には「**それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」とあります。神がひとり子を与えるほどに愛して下さったことによって私たちは「**永遠のいのち**」を得る、その救いが語られているわけですが、その救いは私たちが「**滅びない**」ために与えられていることがここに示されています。この救いを信じ、それにあずかるためには、その救いがなければ滅びてしまうことをしっかりと見つめなければならないのです。そのことは17節以下では、「**さばく**」と「**救われる**」という言葉によって語られています。

17～19節に「**神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかつたからである。そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。**」とあります。ここには何度も、「**さばく**」ということが語られています。それは16節の「**滅びる**」と同じ意味です。神によって救われ、「**永遠のいのち**」を得るという福音の根本が語られているこの箇所において、その救いがなければ私たちは神によって裁かれ、「**滅びる**」のだということが繰り返し語られているのです。

それは何故なのでしょうか。それは、私たちは優れた立派な者だから神に愛され、救われるのではなくて、神に背き逆らっている罪人である私たちを神が愛して下さったことによって救われるのだからです。つまり私たちは、本来は、神によって裁かれ、「**滅びる**」しかない者なのです。私たちがこれから何か悪いことをしたら、神に裁かれ滅ぼされてしまう、というのではありません。私たちは既に、神に逆らい、造り主である神を神として信じ従うことなく、自分の思いによって、自分を神として生きているのです。その結果、神をも隣人をも愛することができなくなってしまい、お互いに傷つけ合い、苦しめ合いつつ生きているのです。それが生まれつきの私たちなのであって、そのような私たちは神に裁かれ、滅ぼされるしかないのでです。その私たちを神が愛して下さって、「**ひとり子**」を与えて下さいました。イエス様のご生涯と、とりわけ十字架の死と復活によって、神は私たちの罪を救し、「**永遠のいのち**」の約束を与えて下さったのです。

私たちがこの救いにあずかるためになすべきことは、この神の、「**ひとり子**」をお与え下さったほどの愛を信じて受け入れ、イエス様を救い主と信じることだけです。「**御子**」を信じる、そのことによって、そのことのみによって、神が私たちを愛して与えて下さった救いにあずかることができるのです。それは逆に言えば、「**御子**」を信じることなし

には、神の愛によって与えられる救いにあづかることができないということです。ですから、神が私たちを愛して下さって、「ひとり子」を与えて下さった、その救いの御業によって、私たち人間は二つに分けられていきます。ひとり子を信じて、神の愛による救いを受け、「永遠のいのち」を与えられていく者と、「御子」を信じることなく、救いを受けることなく、「さばき」と「滅び」への道を歩み続ける者との二つです。18節に「御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかつたからである。」とあるのはそのことを語っています。神が「御子」イエス・キリストを「世」に与えて下さったことによって、裁かれないと裁かれる者が分けられているのです。

19節の「そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。」というのも同じことを語っています。「まことの光」であるイエス様を受け入れないことが、既にその人々の「さばき」となっているのです。神の「さばき」によって、救いもはっきりと与えられるし、その救いを受けることができない者の滅びも明確になるのです。そういう「さばき」が、この世の終りに神によって行なわれる、それがいわゆる「最後の審判」です。聖書はその終りの日の「さばき」を告げています。しかしここに語られているのは、その「さばき」が、神がひとり子イエスを「世」にお与えになったことによって既に始まっている、ということです。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」その救いの御業は、決定的な救いの御業であるがゆえに、同時に「さばき」もあるのです。この救いの御業を受け入れ、イエス様を信じて罪を赦され永「永遠のいのち」に至る救いの道を歩むのか、それを拒み、罪による滅びへの道を歩み続けるのかが、今私たちに問われているのです。

5. 悪を行なう者と真理を行なう者

私たちの前に開かれている二つの道のことが、20~21節で「悪を行なう者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。しかし、真理を行なう者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。」と語られています。「悪を行なう」というのは、何か大それた罪を犯すことではなくて、「光を憎み」、「光の方に来ない」こと、つまり「まことの光」として世に来られたイエス様を信じることなく、この世を覆っている「闇」の中に留まっているということです。「光」であるイエス様のもとに来るなら、「その行いが明るみに出される」とあります。それは隠していた罪が暴かれるということではなくて、私たち人間が根本的に神に背き逆らっている罪人であることが、イエス様の光に照らされることによってこそ明らかになる、ということです。罪を明らかにされることを恐れて、「光」であるイエス様のもとに来ないならば、救いにあづかることもできない、それが悪を行なう者の歩みです。その反対の「真理を行なう者」としての歩みは、「光の方に来る」、つまりイエス様のもとに来て、その救いにあづかることです。そこで明らかになるのは、その人の行いが立派だということではなくて、彼らは神に導かれて生きているということです。

このように私たちの前には今、「御子」主イエスを信じて歩む道と、「御子」のもとに来ることなく、その救いを拒んで歩む道とが開かれています。つまり私たちも今、神の「さばき」に直面しているのです。しかしそれは神が私たちを裁いて滅ぼそうとしておられるということではありません。元々私たちは、罪による滅びへの道を歩んでいたのです。その道しか知らなかったのです。しかしその私たちに神が驚くべき愛によってひとり子を与えて下さいました。その神の愛によって私たちの前に、「御子」を信じて救いに至る新しい道が開かれたのです。

17節に語られているように、「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるため」です。私たちを愛し、私たちが一人も滅びることなく救われて「永遠のいのち」を得ることを願って、神は「御子」を遣わして下さったのです。つまり神は、私たち全ての者を、「御子」による救いへと招いて下さっているのです。この招きに応えて「御子」を信じる者となるなら、それだけで私たちは、「永遠のいのち」に至る救いにあづかることができます。滅びに至る道を歩んでいた私たちが、「永遠のいのち」に至る道を歩む者へと新しくされるのです。 Iコリント 1:18「 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」